

年度別等級	一等	二等	三等	四等	五等	等外	計
明治三十八年度 自六月	三、二一三、九八三斤	二四、九四八、七一九斤	八三、六五九、三三三斤	一一八、七五六、一四六斤	三〇七、五九〇、六五七斤	一六、五一四、一一五斤	五五四、六八二、九四三斤
同三十九年度	八九三、八七八	二〇、五九八、五六六	一二八、四三五、四〇七	一五二、七四五、九〇九	六〇三、二八二、四四六	三五、三五六、二七七	九四一、三二一、四八三
同四十年	三、一一三、四八八	二二、〇四九、一一二	一四五、五六〇、五一五	一二四、五一八、四六二	六七二、五九〇、七八四	二〇、二三三、一九四	九八九、〇六五、五六五
同四十一年	三、七〇九、八〇一	二八、五九八、〇四九	一九六、四七八、四七七	一三〇、〇〇一、八三三	六六九、五四三、七七九	九、七二五、七五八	一、〇三八、〇四七、六九六
同四十二年	三、六八〇、七七五	二六、〇九五、九五四	二〇〇、二五、九九三	一一二、九九三、一一二	六三八、九一一、四九八	三、二二九、〇三四	九九四、九七六、三六六
同四十三年	一、七六八、九二〇	二六、四〇八、二二七	二二二、二六六、一四一	一一九、三九三、四三六	五七三、六一三、二二二	一、六四二、〇五二	九四六、一九一、九九八
同四十四年	八六九、五一〇	二八、一七一、五二四	二三五、〇四二、九五四	八四二、〇四三、五〇七	五九九、五二六、八一四	一、四一八、一〇〇	九四九、二二三、二五二
大正元年	一、三九五、七〇五	三三、〇八一、一〇九	二六二、二二二、九三六	八二、八四〇、四三九	六五四、三九〇、七八四	六一四、三〇一	一、〇三三、四四五、二六四
同二年 自四月至七月	九〇八、三二六	三〇、八七三、四八五	二九五、八九六、九四四	七〇、九五三、三三三	五六一、四〇一、六六七	三九八、一四〇	九六〇、四三二、八七六

第二款 鑑定方法

鑑定方法

鹽ノ鑑定ハ分析ト肉眼トニ依リ之ヲ行フモ常時ノ鑑定ハ肉眼ニ依リ肉眼ニ依リ難キ場合及再鑑定ニ對シテハ分析ニ依ルヲ原則トセリ而シテ肉眼鑑定ハ標本ニ比準シテ之ヲ決定セリ

鹽ノ品質ハ鹽化曹達ノ含量ニ依リ定メラルヘキモノナルヲ以テ之カ鑑定ハ普通ノ分析法ニ據ラサルヘカラサルモ普通ノ分析法ニ依ルトキハ水分及鹽化曹達量ヲ測定セサルヘカラサル外尙夾雜物中ニ含有スル不溶解分硫酸石灰硫酸苦土、鹽化苦土、鹽化加里等食鹽ノ各成分ヲ悉ク析出測定セサルヘカラサル煩累アリ而モ其ノ測定ハ主トシテ重量分析法ニ依ラサルヘカラサルカ故ニ沈澱生成ノ如キ一晝夜ヲ經ルニ非サレハ完結セサルノミナラス加里定量ノ如キハ其ノ加里ト曹達ノ分離ニ要スル時間ノ如キ少クトモ二日以上ヲ費ササルヘカラス故ニ鑑定法トシテ普通分析法

ノ完全ニシテ正確ナルハ言フ俟タサル所ナリト雖最簡捷迅速ニ事ヲ決セサルヘカラサル實務上ノ鑑定法トシテハ不便ヲ免レサルナリ茲ニ於テカ此ノ原則ノ應用トシテ實際ニ適切ナル便法ヲ選ハサルヘカラス即チ長井理學博士ノ研究ニ成レル分析法ヲ採用スルコトトシ現行鑑定法ノ規定ヲ見ルニ至レリ

現行規程ノ鑑定分析法ハ水分及夾雜物量ヲ測定シ之ニ法定ノ各係數ヲ乘シテ其ノ和ヲ求メ之ヲ百ヨリ控除シテ其ノ殘數ヲ鹽化曹達(鑑定成績)ト看做シ鹽ノ等級ヲ決定ス而シテ此ノ鹽化曹達ノ測定法ハ主トシテ容量分析法ニ依ルモノナルカ故ニ短少時間中ニ之ヲ測定シ得ルノミナラス夾雜物ノ如キ悉ク其ノ内容成分ノ分析ニ涉ラサルヲ以テ分析ニ要スル時間ヲ極メテ縮少シ而モ鑑定ノ目的ヲ達シ得ヘシ其ノ方法左ノ如シ

大藏省訓令第四十三號(再録)(明治三十八年五月九日)

鹽務局事務取扱手續(抄録)

第四十五條 鹽ノ鑑定ハ其ノ乾濕、色澤、夾雜物ノ多少等ヲ查察シ標本ト對照シテ之ヲ行フヘシ

第四十六條 前條ノ方法ニ依リ鹽ノ等級ヲ定メ難キトキハ左ノ方法ニ依リ分析試驗ヲ行ヒ其ノ等級ヲ定ムヘシ

- 一 五十瓦ノ可檢鹽ヲ蒸留水ニ溶解シ五百立方センチメートルトナシ之ヲ濾過スヘシ
- 二 第一號ノ濾液七十立方センチメートルヲ採リ多量ノ炭酸重土ヲ加ヘ十分間煮沸シ冷却後蒸留水ヲ加ヘテ原容ニ復セシメ之ヲ濾過スヘシ其ノ濾液五十立方センチメートルニ二分ノ一定規炭酸加里液五十立方センチメートルヲ加ヘ煮沸シ之ヲ濾過シタル後更ニ其ノ濾液八十立方センチメートルヲ採リ二分ノ一定規鹽酸ヲ以テ過剩ノ炭酸加里ヲ滴定シ亞爾加里金屬以外ノ金屬ト化合シタル鹽素ノ量ヲ算出スヘシ
- 三 可檢鹽ヲ以テ適度ノ濃度ヲ有スル鹽液ヲ作り之ニ一定量ノ硝酸コバルト液(硝酸コバルト)三十分ヲ蒸留水六十分ニ溶解シタル液ニ亞硝酸曹達五十分ヲ蒸留水五十分ニ溶解シタル液ヲ加ヘ更ニ水醋酸十分ヲ加ヘテ攪拌シ一晝夜間放置シテ得タル上澄液ヲ加ヘ一定時間内ニ於テ黃色沈澱ノ分離スル狀態ニ依リ加里ヲ檢定シ之ニ化合シタル鹽素ノ量ヲ算出スヘシ
- 四 第一號ノ濾液十立方センチメートルニ蒸留水ヲ加ヘテ百立方センチメートルニ稀釋シ其ノ二十五立方センチメートルヲ採リ十分ノ一定規硝酸銀液ヲ以テ總鹽素量ヲ檢定スヘシ
- 五 可檢鹽十瓦ヲ攝氏百四十度ニ於テ一時間熱シ其ノ減量ヲ以テ水分トナスヘシ
- 六 第二號及第三號ニ依リテ檢定シタル各鹽素量ノ和ヲ第四號ニ依リテ得タル總鹽素量ヨリ減シ其ノ殘數ヲ以テ夾雜物ノ量トナスヘシ

肉眼鑑定法ハ砂糖ノ品位ノ鑑定ニ和蘭標本ヲ用ユルノ例ニ倣ヒタルモノニシテ此ノ法ハ豫メ分

析調製シタル標本ニ照シ眼識ニ依リ其ノ品位ヲ鑑別スルノ方法ナルヲ以テ分析鑑定ノ正確ナルニ若カサルモノアルハ勿論ナリト雖實務上實際ノ鑑定法トシテハ斯ル簡易ナル便法ニ依ラサルヘカラサルハ蓋シ已ムヲ得サル處ナリ故ニ收納官署ニハ豫メ標本鹽ヲ備ヘ之ト對照シテ肉眼鑑定ヲ爲スヲ常トシ肉眼ヲ以テ之ヲ決定シ難キモノ又ハ再鑑定ノ請求アリタル場合ニ於テハ前ニ掲クル所ノ如ク分析鑑定ヲ行フモノナリ而シテ肉眼鑑定ニ要スル比準標本鹽ハ專賣法實施ニ先チ明治三十八年五月主稅局ニ於テ全國各地ヨリ其ノ地方ノ代表的產鹽ヲ蒐收シテ之ヲ調製シ各地取扱官署ニ配付シタル所ナルモ我内地ノ食鹽ハ地方ニ依リ性状ヲ異ニスルヲ以テ之ニ使用スヘキ標本モ亦之ニ應シ各其ノ地方的ノ特性ヲ有スルモノヲ作製シ之ニ依リ鑑定ヲ爲スニアラサレハ鑑定ノ公平ヲ維持スルニ難キ事情アルヲ以テ比準標本鹽ハ各地ニ於テ其ノ地方產鹽ヲ以テ隨時之ヲ作製シテ鑑定ニ用ユルコトニ定メタリ

大藏大臣内訓第一八六五號(再錄) (明治三十八年五月一日)

鹽專賣法施行上取扱方心得内訓(抄錄)

第二十一條 鑑定上使用スヘキ比準標本鹽ハ成ルヘク其ノ地方ニ產出スルモノヲ適當トスルニ依リ各局管内ニ產スル鹽ヲ以テ各等級ノ比準標本鹽ヲ作成シ置クヘシ

標本鹽ノ取扱方ニ關シ左ノ注意ヲ爲シタリ

- 一 鹽ノ品質ヲ鑑定シ其ノ等級ヲ附スルハ之ニ含メル鹽化曹達ノ分量ニ依ルモノニシテ其ノ量ハ分析ニ依ルヲ最モ正確ナル方法トスト雖多數收納鹽ヲ短時間ニ於テ悉ク分析スルハ極メテ困難ナルカ故ニ特殊ノ鹽ニ限り分析ヲ施シ普通一般ノ鹽ニ對シテハ先ツ肉眼ヲ以テ鑑定スルコト

二 比準鹽標本瓶ハ其ノ口ヲ開カサルコト

三 收納鹽ハ鹽務局ノ事務取扱手續第四十四條ニ規定シタル方法ニヨリ其ノ標本ヲ取り約三

十匁ヲ秤量シ空虛ナル標本瓶ニ之ヲ充ツ瓶ノ外部ヲ能ク拭ヒ汚點ヲ去リ清潔ナラシムル
コト

四 前項收納鹽ヲ瓶ニ詰メ其ノ外部ヲ拭ヒ終テ比準鹽標本瓶ノ外部ヲモ能ク拭ヒ收納鹽ト對
照比較シ其ノ品質相一致シタル等級ヲ之ニ附スルコト

五 比準鹽ハ其ノ等級ニ對シテ最少量ノ鹽化曹達量即チ一等鹽九十分、二等鹽八十五分、三等鹽
八十分、四等鹽七十五分、五等鹽七十分ヲ含メルモノナルヲ以テ收納鹽ノ品質カ比準鹽ノ品
質ト一致セス假リニ其ノ品質比準鹽二等ニ劣ルモノ三等ニ優レルコトヲ認メタルトキハ收
納鹽ヲ三等ト定ムルコト

六 比準標本鹽ハ鑑定上便宜ノ爲作製シタルモノナルヲ以テ鑑定熟達スルニ於テハ必スシモ
每度之ヲ使用セサルモ差支ナキコト

明治三十八年十月鑑定分析方法中左ノ改正ヲ爲シタリ

大藏省訓令第六十八號(抄錄) (明治三十八年十月十日)

第四十六條中第二號及第四號ヲ左ノ如ク改メ第三號中「蒸餾水五十分」ヲ「蒸餾水百分」ニ第五號中「百四十度」ヲ「百三十五度乃至百四十度」ニ改ム

一 第一號ノ溶液「百立方」センチメートル「ヲ採リ約五瓦ノ炭酸重土ヲ加ヘ約十五分間煮沸シ後蒸餾水ヲ加ヘテ百瓦トナシ之ヲ濾過シタル後其ノ濾液五十
瓦ヲ秤取シ二分ノ一定規炭酸亞爾加里十立方」センチメートル「ヲ加ヘ約十五分間煮沸シ蒸餾水ヲ加ヘ百瓦トナシテ濾過シ其ノ濾液八十五瓦ヲ秤取シ之
ニ「メチールオレンヂ」液ヲ加ヘテ標示藥トナシ二分ノ一定規鹽酸液ヲ以テ過剩ノ炭酸亞爾加里ヲ逆測シ亞爾加里金屬以外ノ金屬ト化合シタル鹽素ノ
量ヲ算出スヘシ

四 第一號ノ溶液「二十六立方」センチメートル「ヲ取り蒸餾水ヲ加ヘテ二百立方」センチメートル「ヲ分取シ格魯謨酸加里液ヲ標示藥トナシ十分ノ一定規硝
酸銀液ヲ以テ總鹽素量ヲ檢定スヘシ

尋テ又明治四十一年七月左ノ通改正シタリ

專賣局長官達丁第三九〇六號(抄錄) (明治四十一年七月十八日)

第六十二條 前條ノ方法ニ依リ鹽ノ等級ヲ定メ難キトキハ左ノ方法ニ依リ分析試驗ヲ行ヒ其ノ等級ヲ定ムヘシ

一 五十瓦ノ可檢鹽ヲ蒸餾水ニ溶解シ五百立方」センチメートル「トナシ之ヲ濾過スヘシ

二 第一號ノ溶液「百立方」センチメートル「ヲ採リ約五瓦ノ炭酸重土ヲ加ヘ約十五分間煮沸シ後蒸餾水ヲ加ヘテ百瓦トナシ之ヲ濾過シタル後其ノ濾液五十

瓦ヲ秤取シ二分ノ一定規炭酸亞爾加里十立方センチメートルヲ加ヘ約十五分間煮沸シ後二分ノ一定規普性亞爾加里十立方センチメートルヲ加ヘ更ニ蒸留水ヲ加ヘ百瓦トナシテ濾過シ其ノ濾液八十瓦ヲ秤取シ之ニ「メチールオレンジ」液ヲ加ヘテ標示藥トナシ二分ノ一定規鹽酸液ヲ以テ過剩ノ亞爾加里ヲ逆測シ亞爾加里金屬以外ノ金屬ト化合シタル鹽素ノ量ヲ算出スヘシ

三 可檢鹽ヲ以テ適度ノ濃度ヲ有スル鹽液ヲ作り之ニ一定量コバルト液(硝酸コバルト)三十分ヲ蒸留水六十分ニ溶解シタル液ニ亞硝酸曹達五十分ヲ蒸留水百分ニ溶解シタル液ヲ加ヘ更ニ水醋酸十分ヲ加ヘテ攪拌シ一晝夜間放置シテ得タル上澄液ヲ加ヘ一定時間内ニ於テ黃色沈澱ノ分離スル狀態ニ依リ加里ヲ檢定シ之ニ化合シタル鹽素ノ量ヲ算出スヘシ

四 第一號ノ溶液二十立方センチメートルヲ取り蒸留水ヲ加ヘテ二百立方センチメートルトナシ其ノ二十五立方センチメートルヲ分取シ格魯謨酸加里液ヲ標示藥トナシ十分ノ一定規硫酸銀液ヲ以テ總鹽素量ヲ檢定スヘシ

五 可檢鹽十瓦ヲ攝氏百三十五度乃至百四十度ニ於テ一時間間熱シ其ノ減量ヲ以テ水分トナスヘシ

六 第二號及第三號ニ依リテ檢定シタル各鹽素量ノ和ヲ第四號ニ依リテ得タル總鹽素量ヨリ減シ其ノ殘數ヲ以テ曹達ト化合シタル鹽素トシ鹽化曹達ノ量ヲ算出スヘシ

第五號ニ依リ秤定シタル水分ノ量ト本號ニ於テ算定シタル鹽化曹達ノ量トノ和ヲ百ヨリ減シ其ノ殘數ヲ以テ夾雜物ノ量トナスヘシ

鑑定ヲ爲ス場合ニ於テ可檢物ノ採取方ニ付テハ製造人毎ニ品質類似ノモノ包裝百ニ付五ノ割合ニテ各包裝中ヨリ一定量ヲ摘出シ能ク混合シ其ノ相當量ヲ採リテ之ニ充ツルコトトシ左ノ如ク定メタリ

大藏省訓令第四十三號(抄録) (明治三十八年五月九日)

第四十四條 鹽ノ鑑定ヲ爲ス場合ニ於テハ能ク混合シタル上相當ノ量ヲ採リ可檢物ト爲スヘシ但シ包裝シタルモノニ在リテハ同一製造人ノ納付セムトスル鹽ニシテ品質類似シタルモノニ限り包裝百ニ付五(百ニ付五ノ割合カ總數五十以上ニ上ルトキハ五十トス)ノ割合ヲ以テ各包裝ヨリ一定量ヲ摘出シ相混合シテ可檢物ト爲スヘシ

明治四十一年七月ニ至リ品質類似ノモノ收納一件毎ニ同一包裝中ヨリ二個以上ヲ摘出シ其ノ各包裝ヨリ一定量ヲ採リ能ク混合シテ相當量ヲ採リ可檢物ト爲スコトニ改メタリ

專賣局長官達丁第三九〇六號(抄録) (明治四十一年七月十八日)

第六十條 鹽ノ鑑定ヲ爲ス場合ニ於テハ可檢鹽ヲ能ク混合シタル上相當ノ量ヲ採リ可檢物ト爲スヘシ但シ同一製造者ノ納付セムトスル包裝鹽ニシテ品質類似セルトキハ收納一件毎ニ同一包裝中ヨリ二個以上ヲ摘出シ其ノ各包裝ヨリ一定量ヲ採リ相混合シテ可檢物ト爲スヘシ

再鑑定

鹽ノ鑑定ニ對スル不服申立ニ付之カ再鑑定ノ施行ニ付テハ鹽專賣法施行細則ニ於テ規定スルコ

ト左ノ如シ

大藏省訓令第二十二號(再録) (明治三十八年四月一日)

鹽專賣法施行細則(抄録)

第十九條 鹽製造者鹽ヲ納付シタルトキハ鹽務局ハ其ノ品質ヲ鑑定シ相當ノ賠償金ヲ交付ス

第二十條 鹽製造者前條ノ鑑定ニ不服アルトキハ其ノ要領ヲ具シ即時再鑑定ヲ求ムルコトヲ得

再鑑定ノ申立アリタルトキハ鹽務局長ハ二人以上ノ鑑定人ヲシテ分析鑑定ヲ爲サシメ之ヲ決定スヘシ

再鑑定決定シタルトキハ其ノ決定書ヲ作り再鑑定申立人ニ交付スヘシ

再鑑定ハ納付人ニ於テ普通ノ鑑定ヲ不當ナリトシ之カ再審ヲ求ムルニ在ルヲ以テ其ノ請求ハ鹽

ノ賠償金請求以前ナラサルヘカラス此ノ請求アリタルトキハ政府ハ二人以上ノ鑑定人ヲシテ特

ニ分析ヲ行ハシメ更ニ之カ鑑定ヲ爲サシメ再鑑定決定書ヲ作成シ申立人ニ交付スルモノトス(明

治三十八年五月九日大藏省訓令第四十三號)

明治三十八年五月九日大藏省訓令第四十三號

鹽再鑑定決定書

一製 造 人 何 某

一製 造 年 月 日 明 治 何 年 何 月 何 日

一 分 析 試 驗 ノ 成 績

鹽百分中ノ含有量

鹽 化 曹 達 何 程

水 分 何 程

夾 雜 物 何 程

右鑑定ノ成績ニ依リ何等ト決定ス

年 月 日 何鹽務局(出張所)長 氏 名 團

右書式ニ依レハ鑑定成績ノ記入ヲ缺ケルヲ以テ之ヲ記入スルヲ可トシ明治四十年七月左ノ通改

正シタリ(明治四十年七月二十二日)
 (大藏省訓令第三十五號)

第 號 鹽再鑑定決定書

一鹽製造者

一鹽製造年月日

一分析試驗ノ結果ニ依ル鹽百分中ノ含有量

鹽 化 曹 達

水 分

夾 雜 物

一鹽專賣法施行細則第十七條ニ依ル鑑定成績

鹽 化 曹 達

右鑑定ノ成績ニ依リ何等ト決定ス

自 何 年 月 日
 至 何 年 月 日

何 程
 何 程
 何 程
 何 程

年 月 日

何專賣支局長 氏 名 印

再鑑定ノ請求ハ普通ノ鑑定ニ對シ再審ヲ求ムルニ在ル以上ハ可成當初鑑定ヲ爲シタル者以外ノ吏員ヲシテ之ニ當ラシムルコトトシ明治三十九年三月各鹽務局長ニ對シ之ヲ注意シタリ

大藏省主稅局長通牒臨第八六八號 (明治三十九年三月六日)
 鹽ノ收納ニ際シ再鑑定ノ請求アリタル場合ニ於テハ再審ノ本旨ニ則リ可成當初鑑定ヲ爲シタル者以外ノ吏員ヲシテ之ニ當ラシメ候様致度

尋テ明治四十年十月ニ至リ其ノ分析ニ從事スル二人ノ鑑定人ハ各獨立シテ之ヲ行ヒ其ノ成績ヲ平均シテ決定スヘク若シ其ノ二人ノ分析成績カ百分ノ一以上異ナルトキハ更ニ分析ヲ行フヘキコト及技術員ノ配置尠ナクシテ斯ル方法ニ依ルコト能ハサルトキハ請求人ニ於テ異議ナキトキハ之ヲ附近ノ官署ニ送付シ若クハ他ノ技術官ヲ當該官署ニ派シテ之ヲ鑑定セシメ當初ノ鑑定人ハ絶對ニ再鑑定ニ當ラシメサルヘキ旨ヲ注意シタリ

第七章 鑑定

專賣局收納部長通牒甲第七〇八三號（明治四十年十月三十日）

鹽製造者納付鹽再鑑定ノ申立ヲ爲シタルトキ同一鑑定人ヲシテ更ニ分析鑑定ヲ爲サシムルトキハ或ハ前鑑定ト同一結果ヲ繰返スノ憂ナキヲ保シ難キニ付成ルヘク他ノ鑑定人ヲシテ之ヲ取扱ハシメラレ度旨豫テ及通牒置候處技術者ノ配置尠ク之カ餘裕ヲ有セサル場合ニ在リテハ多少ノ時日ヲ要スルモ請求人ニ於テ異議ナキ限之ヲ附近ノ出張所又ハ收納所ニ送致シテ分析セシムルカ若ハ便宜他ノ相當技術者ヲ當該地ニ出張セシメ再鑑定ヲ爲サシムル様御取計相成度

追テ法施行細則第二十條ニ依ル分析鑑定ハ二人以上ノ鑑定人ヲシテ各獨立シテ分析ヲ爲サシムル義ニ有之候處或ハ其ノ解釋ヲ異ニセル向モ有之ヤモ難測ニ付御注意相成度尙各鑑定人ノ鑑定成績相異ナルトキハ其ノ平均ヲ取り若シ百分一以上異ナルトキハ更ニ分析セシムル儀ト御了知相成度

再鑑定ノ結果鹽ノ等級カ原等級ヨリ上進セサルトキハ再鑑定ニ要シタル費用ハ請求人ヲシテ負擔セシムルモノトス而シテ其ノ費額ハ一件四十錢トシテ徴收スルコトトシタリ

大藏省主稅局長通牒第二七六三號（明治三十八年七月三日）
本年四月當省令第二十七號第四條ノ再鑑定費用鑑定人ノ手當及旅費以外ノ實費ハ一件ニ付四十錢ト定メラレ可然存候

其ノ後四十二年七月之ヲ改正シ同年八月以降ヨリ増額シテ七十五錢ヲ徴收スルコトトナレリ

專賣局^{收納}部^{計理}部長依命通牒甲第一七九〇號（明治四十三年七月十九日）

鹽再鑑定實費額ハ明治三十八年七月三日主稅局長通牒ニ依リ一件ニ付四十錢ト規定セラレ居候處現今ニ於テハ此ノ費額ニテハ不足ヲ生スル場合有之ニ付現行規定ノ四十錢ヲ七十五錢ト改メラレ八月一日ヨリ之カ實行方取計相成度

鹽ノ鑑定ハ營業者ノ利害ニ關係ヲ有スルコトノ重大ナルハ多言ヲ要セサル所ナリ而シテ肉眼鑑定ノ正確ヲ期セムトセハ肉眼ニ依リ鑑定シタル鹽ニ對シテ分析ヲ行ヒ其ノ外觀ト内容實質トノ關係ヲ對比講究セサルヘカラサル所ナルヲ以テ常ニ分析ヲ實行シテ肉眼鑑定ノ當否ヲ勘案熟慮シテ常ニ修養ヲ怠ラサルヘキコトニ付テハ專賣法實施以來常ニ當務者ニ督勵ヲ加ヘタル所ナリ隨テ法實施以來年々鑑定ニ對スル信用重ヲ加ヘ再鑑定ノ如キ漸次其ノ數ヲ減スルノ傾向ニ在ルハ慶フヘキナリ再鑑定ニ關スル變遷左ノ如シ

再鑑定ノ變遷

年	別	件	數	元	等	級	決	定	內	譯	計

明治三十八年	一八四件	一五七件	四件	二二二件	一八四件
同三十九年	四一六	三〇三	七六	三七	四一六
同四十年	二二五	一六一	四二	一一	二二五
同四十一年	二二六	一七四	六〇	二	二二六
同四十二年	五四五	四〇〇	一〇九	三六	五四五
同四十三年	七三一	四九一	二三〇	一〇	七三一
同四十四年	二六三	一九二	七一	一	二六三
大正元年	一一九	一一	七	一	一一九
同二年	一〇七	七七	二九	一	一〇七

第二節 製鹽試驗

政府ニ於テ施行シ來レル製鹽試驗ニハ從來ノ煎熬法ヲ根本的ニ改メムトスル比較的大規模ノ計劃ニ成ル「カナワ」式又ハ真空式製鹽方法ノ如キアリ又現在ノ製鹽方法ノ上ニ或程度ノ改善ヲ加フルヲ以テ目的トセル改良試驗ノ如キモノアルモ共ニ鹽ノ生産費ヲ節約シ品質ヲ改良シ以テ良質廉價ノ食鹽ヲ一般ニ供給セムトスルノ目的タルヤ一ナリ而シテ後者ニ屬スル試驗ハ製鹽試驗場ニ於テ施行セルモノヲ除キテハ凡テ其ノ事項及方法ヲ示シテ之ヲ當業者ニ囑托シテ施行セシメ來レリ

「カナワ」式製鹽法

「カナワ」式製鹽試驗ニ關シテハ明治三十一年農商務省カ鹽業調査所ヲ起シ翌三十二年廣島縣下松永ト千葉縣下津田沼トニ試験場ヲ建設シテ之カ研究ニ著手シタルニ淵源セリ蓋シ元來我内地ノ食鹽ハ海水ヲ濃縮シ更ニ之ヲ煎熬シテ製造スルモノナルヲ以テ生産費ヲ要スルコト多キノミナラス其ノ品質亦不良ナリ然レトモ歐米鹽ハ岩鹽、泉鹽又ハ天日製鹽等天與ノ惠澤ニ據ルモノナル